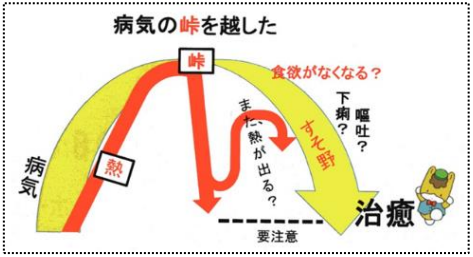
09-03-05 熱は病気と違います

熱は病気と違います
病気が有るから熱が出たのです。
➡ *熱は下がってもまだ病気です。*



上右の図は、一般的な“**病気の流れ**“とみて下さい。

① “**熱**”は、上がったり下がったり、かかった病気に“特有の形”（＝ウィルス性とバイ菌性では、熱の型が違います）をとりながら平熱に戻ります。ただし、バイ菌による病気は、早く治療しないと重症になる場合も有ります。（＝『“**熱**”は病気と違います。病気が有るから“**熱**”が出たのです』）。病気によっては、『まだ、治っていないよ！』と、もう一度熱が上がる事も有ります。更に、熱は、その出方（＝熱型）で病気の診断ができる場合も有ります。☞ 熱の経過を見る場合は、医師の指示または監視下でお願いします。

② 更に、**カラダ** が“元に戻る”には、病気が**治癒した** から 2～3 日後になる場合が多いようです。

（病気の診断には、『熱が何度だった』だけでなく『熱の変化（＝グラフ）』も大切です。熱の記録をかかりつけ医と相談してください。）

お母さん方にとってお子さんの『熱が出た』『熱が下がらない』は最大の心配事だと思います。しかし、“熱”は “病気ですよ！”と言うサインにすぎません。一方、50 年ほど前に子ども用の飲みやすい抗生物質が売り出されてから“子どもの医療”が激変しました。『熱が出たら抗生物質』と言われたほど頻繁に使われた結果、バイ菌による病気が非常に少なくなり、最近では、熱の出る病気の大部分が抗生物質の効かない“ウィルス性の病気”に変わっています。しかも、ウィルス性の“熱”とバイ菌の“熱”とでは“熱”の意味が違います。ウィルス性の“熱”は、“カラダ”が熱を出して“ウィルス”を追い出しているのです。つまり、“熱”は、“カラダ”がウィルスと戦っている“証拠”であり、“武器”なのです。『下げれば良い』『下げなければいけない』と、一概に言えないのはそのためです。また、“ウィルス性の熱”は、その出方（＝熱型）で病気の診断や、今後を予測できる場合が多く、外来受診の際には、熱の出方と症状の変化を正確に伝えてもらえると誤診は少なくなります。

最後に、“熱”は、全てが“かぜ”とは限りません。命に係わる病気も、“かぜ”同様に“熱“から始まる事があります。熱は、『様子を見よう』ではなく、早期にかかりつけ医を受診し管理下での経過観察をお勧めします。